志布志のお殿様（とのさま）

1、築城以前～肝付氏？　1164年～（肝付氏による諸県郡救仁院の領有）

肝付氏、救仁院氏、安楽氏、千種氏などが志布志を治めていました。志布志城の正確な築城年代は不明ですが、1336年には肝付氏が城を守っていたことが記録に残されています。

2、楡井氏　1338?～1351年　**→城主編１**

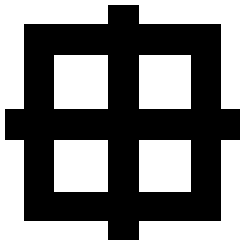
信濃国(現在の長野県)出身の一族。志布志城のうち最初に造られたとされる松尾城を拠点として、南朝方として活躍しました。北朝方の畠山氏に敗れ、再び挙兵しましたが松尾城を奪回することはできませんでした。

3、畠山氏　1351～1357年　**→城主編２**

武蔵国(現在の埼玉県)を本拠とする足利氏の一門。畠山直顕が北朝方の日向国大将として南九州で活躍しました。志布志城の内城を拠点にしましたが、同じ北朝方の島津氏との勢力争いに敗れ、北部九州へ撤退しました。

4、新納氏　1357～1538年　**→城主編３・４・５**

島津氏の有力分家のひとつ。分家のため、家紋が本家の島津氏と少しだけ異なっています。島津氏と共に畠山氏を破り、内城を居城としました。以後、約180年に渡り志布志を領有しました。



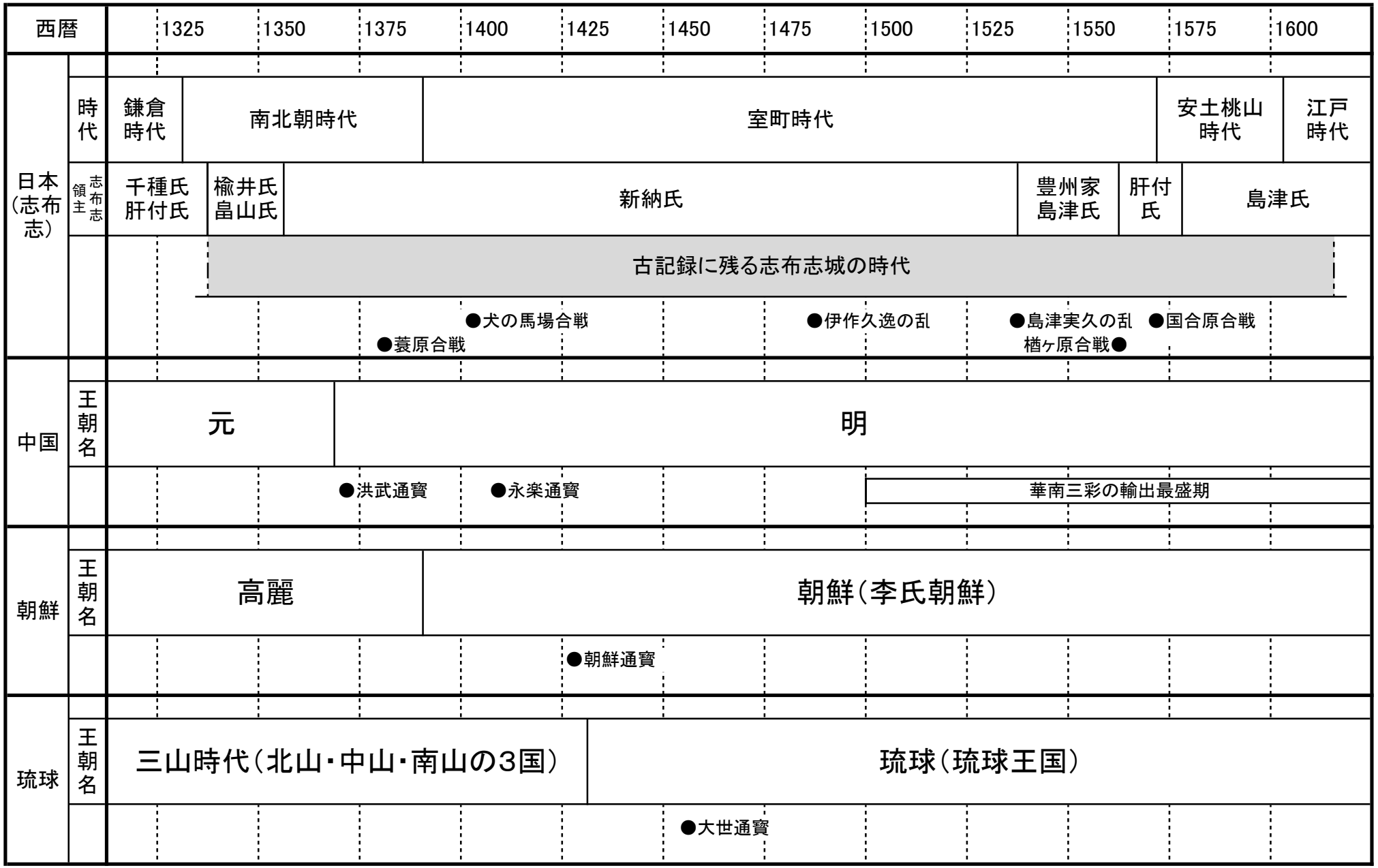
5、豊州家島津氏　1538～1562年　**→城主編６**

島津氏の分家のひとつ。飫肥や福島(串間)を領有しました。分家のため、家紋が本家の島津氏と異なっています。島津氏内部の勢力争いによって伊東氏・肝付氏・北郷氏と協調し、新納氏を破り志布志を手に入れました。

6、肝付氏　1562～1576年　**→城主編７**

肝付郡高山(現在の肝付町)を本拠とした平安時代から続く一族。豊州家島津氏と協調した後、豊州家島津氏を破り志布志を領有しました。伊東氏と協調して島津氏と対立しましたが、勢力が弱まり島津氏に降伏しました。以後、志布志には島津氏の地頭が置かれました。

東アジアと志布志城の関係年表



楡井頼仲（楡井氏）

志布志城における楡井氏の時期：1338？～1351年

1．楡井氏とは

楡井氏は、第56代清和天皇を先祖とする清和源氏の一族です。なかでも清和天皇の曾孫である源満仲を先祖とする一族で、満仲流とも呼ばれます。

家紋(清和源氏満仲流)

満仲の孫である頼清は、信濃国更級郡村上郷を拠点とし、村上氏を名乗りました。また、頼清の弟である頼季は、信濃国高井郡井上郷を領して井上氏の祖となりました。信濃国の村上氏と井上氏の流れを合わせて信濃源氏と呼びます。

村上氏の祖である頼清から数えて８代後の村上基成は、信濃国高井郡楡井邑を領して、楡井氏を名乗りました。楡井邑は現在の長野県須坂市近辺にあたります。

なお、村上頼清と井上頼季の兄である源頼義の子孫が、鎌倉幕府を開いた源頼朝となります。

2．楡井頼仲

1336年、信濃国から遠く離れた志布志の地に、楡井頼理の名が登場します。頼理は信濃の楡井氏の分家筋と考えられ、どのような理由で志布志に勢力を築くことになったのかは不明ですが、息子である頼仲、頼重とともに勢力を拡大していきます。なお、頼理と頼仲の関係を、同一人物が名を変えたものとする説もあります。

頼仲が一族の中心となってからは、松尾城を拠点として大隅に勢力をのばし、大姶良城(鹿屋市)や胡麻ヶ崎城(大崎町)を領有し、志布志に大慈寺を創建しました。

その後、肝付氏と協力し南朝方として戦いますが、北朝方の畠山氏に敗れ肝付氏を頼って高山に逃れました。その後、二度に渡り挙兵しますが、力及ばず畠山氏に敗れ、志布志で自害しました。

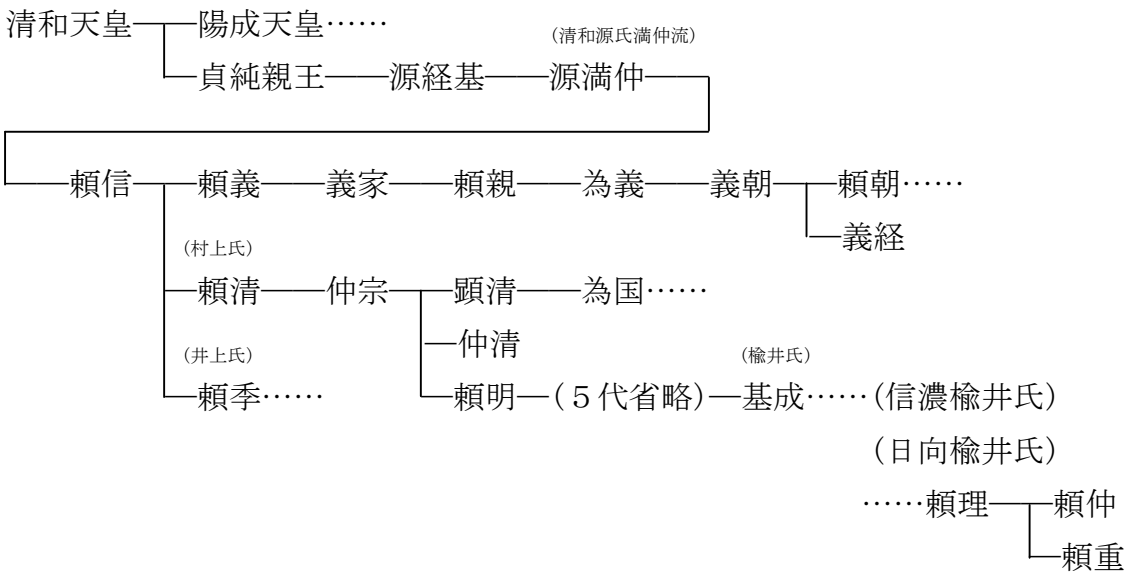
頼仲の墓と位牌は、大慈寺に残されています。頼仲が拠点とした松尾城には、昭和５年(1930年)に忠義を讃えた石碑が建てられ、石造りの祠が残されています。祠には桜文(または桔梗文)と揚羽文(蝶文)に似た家紋が刻まれていますが、頼仲の家紋であるかは不明です。

また、肝付氏を頼って落ちのびた高山では弓張城を築き、その城跡である四十九所神社には、頼仲の忠義を讃えた誠忠碑が造られています。

3. 関連年表

1336年　頼理、畠山氏の命を受け肝付氏の配下を攻める。
1339年　頼仲、肝付氏を破り大始良城(鹿屋市)を領有する。
1340年　頼仲、大慈寺を創建する。
1342年　頼仲、祢寝院横山村を制圧する。
1347年　頼仲、肥後中務丞(種子島時基か)とともに種子島地頭職を得る。
1348年　頼仲、志布志松尾城を拠点とし、頼重は大崎胡摩ヶ崎城で挙兵する。
1350年　楡井氏と肝付氏の連合軍が大隅を侵略。島津氏が重久氏に対抗を命じる。
1351年　２月、楡井頼仲、加瀬田城(鹿屋市輝北町)を攻略
４月、畠山氏の配下である祢寝氏に大始良城を攻められ、陥落。
８月、祢寝氏に加瀬田城を落とされ、頼重は志布志へ逃れる
畠山氏、頼仲の志布志松尾城を攻め落とす。
12月、頼仲と頼重、大始良城を奪還、再び挙兵する。
1354年　２月22日、頼仲の手勢が鹿屋一の谷城に攻め入り籠城するが、24日落城
同日、木谷城も陥落。25日には大始良城落城、胡麻ヶ崎城に逃れる。
1357年　１月27日、頼仲、胡麻ヶ崎城にて三度挙兵するが、畠山氏、祢寝氏らによって攻め囲まれる。
２月５日、胡麻ヶ崎城にて頼重戦死、頼仲は志布志に逃れるが、松尾城も落城し大慈寺宝池庵(宝地庵)にて自害。※宝池庵は、現在の大慈寺本堂。

4. 楡井氏系図



畠山直顕（畠山氏）

志布志城における畠山氏の時期：1351～1357年

1．畠山氏とは

畠山氏は、第50代桓武天皇を先祖とする平氏の一族である秩父氏が、武蔵国男衾郡畠山郷(現在の埼玉県深谷市畠山周辺)を領有し、畠山氏を名乗ったことに始まります。後に、清和源氏の足利義純が婚姻によって畠山氏の名と領地を継承しました。

足利氏の一門として室町幕府の要職を務めましたが、応仁の乱(1467～1477)以後には衰退しました。

家紋(清和源氏足利氏流)

2．畠山直顕

畠山氏を継いだ足利義純より５代後の子孫に畠山直顕があります。(初め義顕、後に直顕)

南北朝の争乱の中、北朝方のリーダーである足利尊氏は、南九州の南朝方勢力を制圧するため、畠山直顕を日向国大将に任命しました。

1336年、直顕は日向国大将として赴任すると、北朝方であった国富の土持氏や日下部氏を配下としました。1338年に南朝方の伊東氏と野辺氏、1339年に三俣院の肝付氏を従えた功績により、1345年に日向守護職に任じられました。

同じころ、南九州の北朝方勢力であった島津氏(島津５代貞久)は、薩摩・大隅・日向の守護職を有していましたが、日向守護職は畠山氏のものとなり、1363年に島津師久(総州家)と島津氏久(奥州家)によって、薩摩と大隅を分割して治めることとなりました。大隅守護職を継承した氏久と、大隅にまで勢力をのばそうとした直顕との関係は、同じ北朝方に属しながらも次第に悪化しました。氏久は直顕に対抗するために、一時的に南朝方に転じたりもしています。

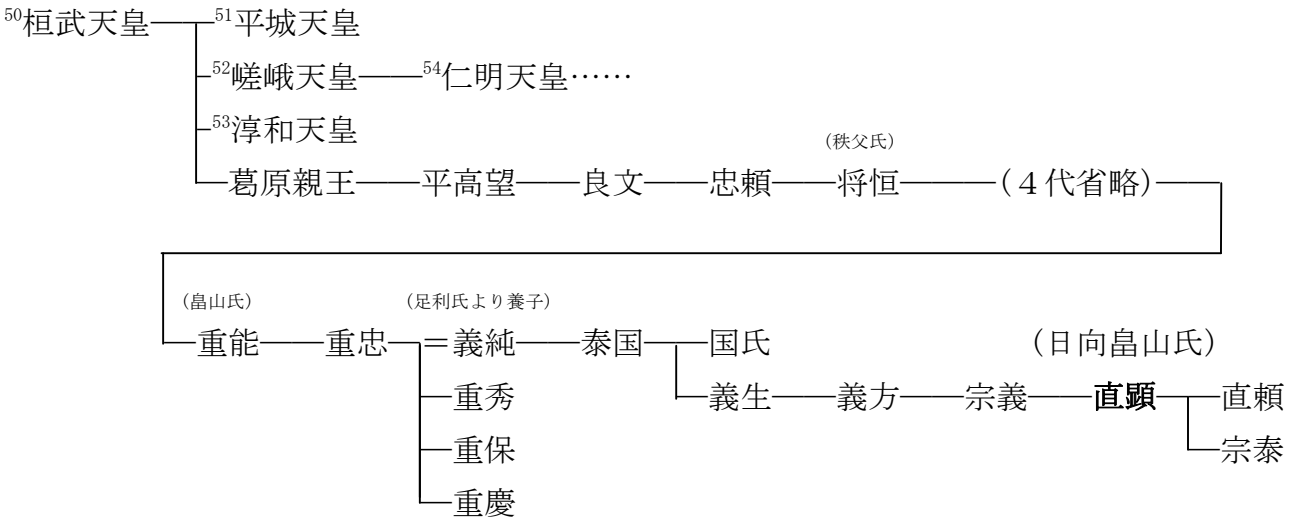
直顕は、幕府の意向を無視して領土の獲得を進め、大隅に勢力を持つ南朝方の肝付氏や楡井氏と戦いました。

1351年に志布志城(松尾城)の楡井氏を破り志布志を領有し、その後二度にわたる楡井氏の反撃を防ぎました。しかし、1357年に島津氏久の助けを得た新納実久に敗れ、撤退しました。その後、南朝方勢力である肥後(熊本)の菊池氏に大敗し、豊後(大分)へと逃走しました。

3. 関連年表

1351年　３月、畠山氏を中心とする北朝勢と南朝方の楡井氏の戦いが始まる（８月まで）
　　４月、直顕、配下の祢寝（ねじめ）氏に楡井氏の大始良城を攻めさせ、陥落させる
　　直顕、救仁郷（くにごう）氏が傘下（さんか）に入ったことを肥後氏に告げ、参加を促す
　　８月、祢寝（ねじめ）氏が加瀬田城を落とし、楡井氏は志布志へ逃れる
　　直顕、楡井氏の志布志松尾城を攻め落とす
1352年　４月、足利義詮（よしあきら）、島津氏に命じ伊東氏とともに直顕を討たせる
　　足利尊氏、島津氏に命じ穆佐院の畠山氏を攻めさせる
　　７月、直顕、子の重隆と大隅に侵攻、肝付氏は降伏、島津氏は鹿児島に敗走
1353年　２月、足利義詮、島津氏らに命じ畠山氏らを穆佐院・島津荘より追わせる
　　10月、島津氏、大隅の敵味方を記し、畠山氏の攻勢を訴える
1355年　６月、島津氏、畠山氏の攻勢を憂い、事情を幕府に訴える
　　８月、足利尊氏、島津氏に直顕らを討たせる
1356年　島津氏久・北郷資忠、南朝方につく。足利尊氏、北郷氏の領地を奪い球磨の相良氏に与える。師久・氏久は北郷氏に財部院を与える
1357年　１月、島津氏ら、大隅加治木で畠山勢と戦い25日に至る
　　楡井頼仲、大崎胡麻ヶ崎城を取り挙兵。直顕ら、これを攻め囲む。
　　２月、胡麻ヶ崎城、落城。頼仲は松尾城に逃れるが落城し自害する。
　　３月、畠山氏、島津軍と加治木で戦い、敗走。志布志内城に入り松尾城の新納氏を攻める。島津氏久、新納氏を助け直顕を破る。直顕、櫛間（串間）に退き、さらに飫肥に退き伊東氏に助けを請うが断られ、穆佐に帰る。
　　11月、菊池氏、穆佐の畠山氏を攻め、直顕は三俣城に走る（1358年説あり）

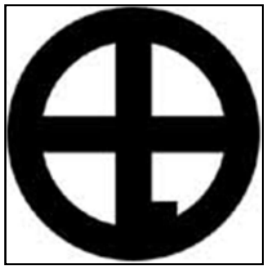
4. 畠山氏系図



新納実久（新納氏1）

志布志城における新納氏の時期：1357～1538年

1、新納氏とは


新納氏の家紋

新納氏は島津氏の分家です。1318年、島津４代忠宗が四男時久に日向新納院を与え、時久が1335年(または1336年)に新納院の地頭となり、新納氏を名乗ったことに始まります。

1350年、畠山氏が時久の居城である新納院高城を攻め落とし、時久は幕府より日向救仁院を与えられます。救仁院は、現在の志布志、松山、有明の東半分に相当する地域ですが、この時期は楡井氏が志布志の松尾城を本拠地としており、新納氏は名目上の支配者にすぎませんでした。新納氏が実質的に志布志の領主となったのは、楡井氏が畠山氏に敗れた後、島津氏の協力を得た新納氏の２代実久が畠山氏を撃退した1357年になってからでした。その後、約180年もの長きにわたり新納氏は志布志を治めました。新納本家が志布志を離れた後、鹿児島に移った分家筋は、伊佐(大口)や川辺の領主となり、島津氏に仕えました。

2、犬之馬場合戦

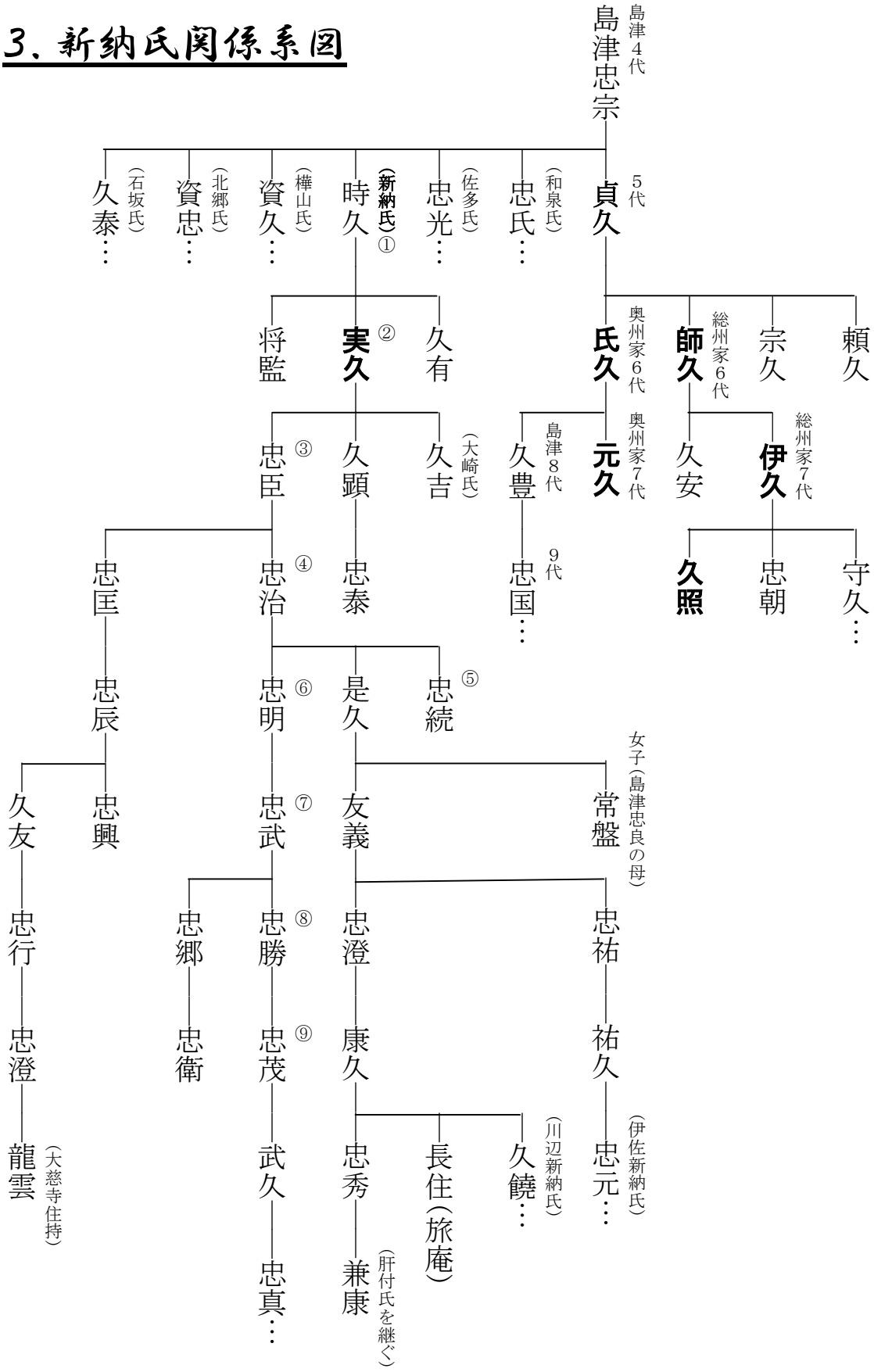
1363年、島津５代貞久は、薩摩を三男師久に、大隅を四男氏久に譲り、分割して治めることにしました。ふたつの島津家は、師久が上総介を名乗ったことから総州家、氏久が陸奥守を名乗ったことから奥州家と呼ばれました。総州家と奥州家は、当初は協力していたものの次第に不仲となり、争いがおきました。氏久が志布志城に居城していたこともあり、志布志の新納氏は奥州家氏久方につきました。

奥州家７代元久には世継ぎがなかったため、総州家７代伊久の三男である久照を後継者として養子に迎えることで両家の和睦をはかりました。しかし、この養子縁組は元久側から解消され、久照は総州家に戻されました。これにより、両家の不仲は決定的なものとなりました。

元久の家臣であった本田氏は久照を戻すことに異を唱え、1401年３月３日、久照を将として串間より志布志城を攻めました。志布志城の新納実久は都城に遠征していたために兵力は手薄でしたが、幟を立てた住民が石を投げて応戦し、兵が戻るまで防ぎきったと伝えられています。兵を戻した実久は、宝満寺前の河原で本田氏を破り、志布志を守りました。

この戦いは犬之馬場合戦と呼ばれ、戦死した熊田原兄弟の武勇をしのび、兄弟を模して造ったと伝えられる仁王像が宝満寺跡に残されています。また、志布志では３月３日に前川河口で行われた石合戦や、３月３日に幟を立てて男児の節句を祝う風習がありましたが、これらは犬之馬場合戦を記念したものと伝えられています。

3、新納氏関係系図


島津4代
島津忠宗
5代
貞久
(和泉氏)
忠氏…
(佐多氏)
忠光…
(新納氏)①
時久
(樺山氏)
資久…
(北郷氏)
資忠…
(石坂氏)
久泰…
奥州家6代
氏久
総州家6代
師久
宗久
頼久
将監
②
実久
久有
奥州家7代
元久
島津8代
久豊
9代
忠国…
総州家7代
伊久
久安
久照
忠朝
守久…
③
忠臣
久顕
忠泰
(大崎氏)
久吉
忠匡
④
忠治
忠辰
忠興
⑤
忠続
⑥
忠明
是久
⑦
忠武
友義
女子(島津忠良の母)
常盤
久友
忠行
忠澄
(大慈寺住持)
龍雲
忠郷
忠衛
⑧
忠勝
忠澄
⑨
忠茂
武久
忠真…
康久
忠秀
兼康
(肝付氏を継ぐ)
長住(旅庵)
(川辺新納氏)
久饒…
忠祐
祐久
(伊佐新納氏)
忠元…

新納忠続・新納忠茂（新納氏2）

志布志城における新納氏の時期：1357～1538年

1．島津久逸の乱

1458年、島津９代忠国は日向の伊東氏への備えとして、志布志の新納忠続に飫肥城を与えて守らせました。志布志は、忠続の弟である是久と忠明が守ることとなりました。また島津10代立久は、さらなる備えとして飫肥城と志布志城の中間にある櫛間城(宮崎県串間市)を伊作家島津久逸に守らせました。久逸は勢力拡大のために伊東氏と協調する様子を見せたため、新納氏が久逸を伊作へ戻すよう島津11代忠昌に願い出て、了承されました。

久逸はこれに反発し、日向の伊東氏や豊後の大友氏と連携して忠昌に対して反乱をおこしました。1484年、久逸は飫肥の新納忠続を攻撃しました。この時、志布志にいた新納忠続の弟のうち忠明は兄に味方しましたが、娘が久逸の息子に嫁いでいた是久は久逸に味方したため、志布志の将兵は敵味方に分かれて戦うこととなりました。

反乱の結果、島津11代忠昌に敗れた久逸は降伏し、忠昌は久逸を串間から伊作に帰しました。新納忠続は飫肥から志布志に戻され、末吉・財部・救仁郷を新たに与えられました。串間と飫肥は、この戦いで功績をあげた豊州家島津氏に与えられました。

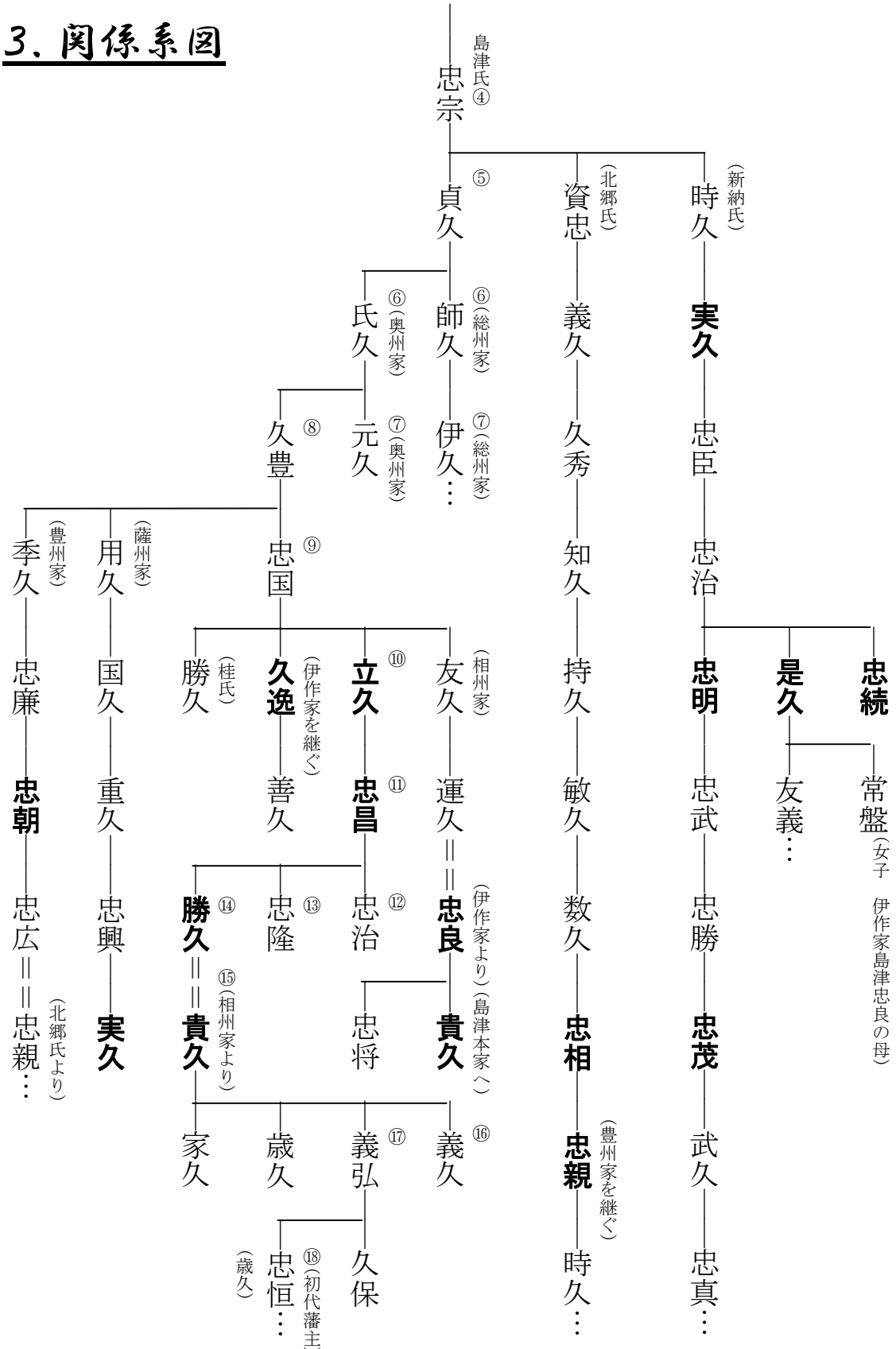
2．島津実久の乱

新納氏は飫肥の豊州家島津氏や都城の北郷氏、日向の伊東氏との対立の中で、時に島津本家にも反発しながら領土を拡大しました。新納忠茂の頃、1535年には、北は財部・梅北、西は福山・垂水、南は大崎までを領地としていました。

この頃、島津氏の分家である薩州家島津実久は島津14代勝久を圧迫し、弱体化した本家に代わり島津氏を掌握しようとしました。そのため、14代勝久は伊作家の島津忠良に助勢を求め、その子である島津貴久を養子として15代を継がせました。これに反発した薩州家島津実久は忠良・貴久親子を相手に反乱を起こしました。

1535年、薩州家島津実久に呼応して、飫肥の豊州家島津忠朝、都城の北郷忠相、清水(国分)の本田董親、高山の肝付兼続、根占の禰寝氏らが志布志に集まりました。しかし、志布志の新納忠茂は応じませんでした。そのため、1536年以降、飫肥の豊州家島津氏、都城の北郷氏、高山の肝付氏らにより、志布志は三方から攻められることになりました。1538年に新納氏は降伏し、豊州家島津氏に志布志城を明け渡し、志布志を去りました。この後、志布志を含む救仁院は豊州家島津氏が領有し、救仁郷(大崎と有明の西半分)は肝付氏が領有しました。これにより、約180年にも及んだ新納氏の志布志領有は終わりを告げました。

3、関係系図


忠宗
島津氏④
貞久
⑤
師久
⑥（総州家）
伊久…
⑦（総州家）
氏久
⑥（奥州家）
元久
⑦（奥州家）
久豊
⑧
忠国
⑨
勝久
（桂氏）
久逸
（伊作家を継ぐ）
善久
立久
⑩
忠昌
⑪
忠治
⑫
忠隆
⑬
勝久
⑭
貴久
⑮（相州家より）
家久
友久
（相州家）
運久
忠良
（伊作家より）
貴久
（島津本家へ）
忠将
義久
⑯
歳久
義弘
⑰
忠恒…
⑱（初代藩主）
（歳久）
久保
資忠
（北郷氏）
義久
久秀
知久
持久
敏久
数久
忠相
忠親
（豊州家を継ぐ）
時久…
時久
（新納氏）
実久
忠臣
忠治
忠明
忠武
忠勝
忠茂
武久
忠真…
是久
友義…
忠続
常盤（女子　伊作家島津忠良の母）
用久
（薩州家）
国久
重久
忠興
実久
季久
（豊州家）
忠廉
忠朝
忠広
忠親…
（北郷氏より）

新納氏関連年表（新納氏３）

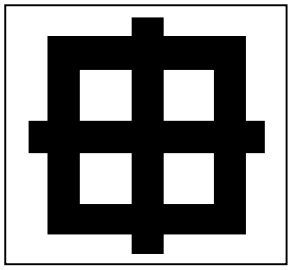
西暦	和暦	島津氏在位年	新納氏当主	内　容
1335	建武２	５代貞久 1318–1363	初代時久	島津宗家４代忠宗の子、時久が日向児湯郡新納院の地頭に任じられ、高城に入り新納氏と称す。
1349	正平４			足利尊氏・直義兄弟の対立に際し直義方に与し、その功績により日向国救仁院を得る。（異説あり）
1350	正平５観応１			日向守護畠山直顕に高城を攻め落とされ、本拠地を日向国救仁院に移す。 幕府より日向国救仁院を与えられるが、志布志は楡井頼仲の本城であり、初代時久の所在は不詳。（初代時久は薩摩高江(薩摩川内市？)も領有していた。）
1357	正平12延文２		２代実久	初代時久の志布志入城はこの前後か 松尾城の実久は内城の畠山直顕に責められるも、島津氏久(後の宗家６代)の援軍を得て勝利。
1365	正平20貞治４	６代氏久 1363–1387		島津氏久、志布志に居を定めたのはこのころか
1377	天授３永和３			氏久、今川満範と蓑原(都城市)で戦う。２代実久も氏久に従い出陣。（蓑原合戦※1379年との説あり）
1387	元中１至徳２	７代元久 1387–1411		５月４日、島津氏久、鹿児島で没す。島津孝久が元久と名を改め７代当主となる。
1401	応永８			３月３日、櫛間の本田忠親、志布志を攻め、熊田原兄弟ほか戦死。（犬の馬場合戦）
1402	応永９			島津元久(宗家７代)の命により、志布志の銭銀唐物武具を鹿児島福昌寺に移す。
1404	応永11			総州家と奥州家の和睦なる。元久、この頃鹿児島清水城へ移る。
1412	応永19	８代久豊 1411–1425	３代忠臣	４月28日、３代忠臣、救仁郷比志田村(大崎町菱田)の一部を大慈寺に寄進。
1413	応永20			７月、新納忠臣、救仁院伊崎田条中薗村を大慈寺に寄進。
		９代忠国 1425–1470	４代忠治	４代の詳細不明
1441	嘉吉１		５代忠続	５代忠続、宗家９代忠国の命により樺山・北郷・肝付等とともに大覚寺義昭を櫛間院永徳寺にて自害させる。
1458	長禄２			５代忠続、日向伊東氏への備えとして飫肥に移される。志布志は忠続の弟是久・忠明が領する。（1459とする資料あり）
1476	文明８	10代立久 1470–1474		薩州家２代国久と豊州家初代季久が宗家11代忠昌に背き、忠昌は本拠の清水城から伊集院一宇治城に退く。 伊作久逸と新納忠続が鹿児島の守りにつく。
1484	文明16	11代忠昌 1474–1508		日向における伊作久逸の勢力拡大を恐れ、久逸を伊作に戻すよう宗家に進言し受け入れられるが、久逸は反発し日向の伊東氏と連携し飫肥の忠続を攻める。12月、伊東祐国により飫肥落城。
1485	文明17			宗家11代忠昌は飫肥救援に向かい、蒋田にて伊東氏を破り、久逸を櫛間に追撃し降伏させる。
1486	文明18			５代忠続は飫肥より志布志に戻され、末吉・財部・救仁郷を得る。飫肥・櫛間は豊州家２代忠廉に与えられる。 蓬原の大寺氏失脚か。蓬原は新納氏の支配下に。
1490	延徳２			12月、将軍義頼、５代忠続に薩摩国浦々の査察を命じる
			６代忠明	６代の詳細不明
			７代忠武	新納７代忠武、宗家11代忠昌に叛し加世田城を落とす
1493	明応２			飫肥福島の豊州３代忠朝、新納７代忠武と関係悪しく、兵を構える。

西暦	和暦	島津氏在位年	新納氏当主	内　容
1494	明応３	12代忠治1508–1515		都城の北郷数久とともに梅北の豊州家３代忠朝を攻め、梅北を領す
1495	明応４			７代忠武は百引平房・梅北３城を併領
1506	永正３	13代忠隆1515–1519		高山の肝付兼久、島津忠昌に背く。８月６日、忠昌は兼久を攻める。兼久の求めに応じ10月12日に７代忠武は忠昌を攻め、敗れた忠昌は鹿児島に撤退する。
1519	永正15			都城の伊集院氏が島津宗家14代勝久に背く。７代武忠は伊集院氏を助け勝久に敵対。勝久の命を受けた溝辺の肝付氏に討たれる。
1523	大永３	14代勝久1519–1526	８代忠勝	８月、豊州家３代忠朝と敵対する肝付兼興の串良城攻略に助勢し、串良城は８代忠勝の二男忠常に譲られる。(1524年９月説あり)
				12月、宗家14代勝久、伊地知重周に新納氏の槻野城を攻めさせるが、８代忠勝これを破る。重周ほか730余人戦死。（月野伊屋松の戦）
1524	大永４			11月29日、肝付兼興が串良城を襲い、島津忠吉(宗家14代勝久の子)が戦死。12月３日落城。８代忠勝は島津軍への援軍を出さず、豊州家３代忠朝と不和が生じる。
1527	大永７	15代貴久1526–1566		11月、８代忠勝、清水の本田氏とともに宗家先代勝久に反し、大隅宮内の正八幡宮を炎上させる。
1528	享禄１			５月１日、８代忠勝は梅北城に出て日向の伊東祐充と中之郷冷水で戦う。北郷８代忠相が伊東氏を助け、８代忠勝敗退、志布志に帰る。
1535	天文４		９代忠茂	８月14日、豊州家３代忠朝が都城の北郷８代忠相とともに、９代忠茂の領地である末吉・松山・梅北を侵略する。
				10月、宗家にとって代わろうとした薩州家５代実久に応じて、飫肥の豊州家３代忠朝、都城の北郷８代忠相、清水(国分)の本田董親、高山の肝付兼続、根占の禰寝氏らが志布志に集まる。９代忠茂は応ぜず。
				新納氏の所領は、志布志を居城として安楽・松山・大崎・梅北・財部・末吉・岩川・恒吉・市成・平房・高隈・垂水・廻・牛根
1536	天文５			８月11日、豊州家３代忠朝が櫛間より志布志の先代忠勝・９代忠茂親子を攻める。10月18日、忠朝の兵が志布志の町を払い、横峰で戦い新納方敗れる。
1537	天文６			３月３日、北郷８代忠相が先代忠勝の岩川新城を落とす。(1538年とする資料あり)
1538	天文７			１月、豊州家３代忠朝・北郷８代忠相・肝付兼続が三方より、新納領を侵略する。
				同月３日、忠相は財部を攻め４日には旧財部領を奪回。
				同月11日、忠朝が大崎城を攻め２９日落城。兼続は高岳城・百引城を攻め取る。
				２月２日、忠相が庄内梅北城を攻め取る。
				兼続は平房城を攻め取り、16日に大崎野卸城を落とし、21日には大崎城を領す。
				同月20日、忠朝が安楽城を攻略。
				４月２日、忠朝が夏井砦を落とす。
				５月16日、肝付兼続が高岳城(高隈郷)を攻め取り祢寝氏に与えて和睦する。また、百引城(西原城)を落とす。
				７月13日、肝付兼続が蓬原城を落とし、16日には恒吉を奪取。
				同月23日、忠朝・忠相は末吉・松山を抜き、肝付兼演らと志布志本城を包囲。
				先代忠勝、宗家15代貴久に救援を請うが成らず、26日に講和。
				11月19日、豊州３代忠朝が福島から志布志に移る。先代忠勝は櫛間保木(市来)に50町を与えられ、９代忠茂は母とともに伊東氏を頼り佐土原へ去る。
				新納領は、財部・三俣院高城を北郷忠相、救仁郷を肝付兼続、救仁院その他は豊州家忠朝が領す。末吉は忠朝領となり、松山城は平山氏に還る。

島津忠朝(豊州家島津氏)

志布志城における豊州家島津氏の時期：1538～1562年

1．豊州家島津氏とは


豊州家の家紋

豊州家は島津氏の分家のひとつで、島津８代久豊の三子である島津季久に始まります。季久が豊後守を称したことから豊州家と呼ばれました。季久は帖佐を領有していましたが、1486年、２代忠廉のとき伊作家島津久逸の反乱を機に、新納忠続に代わり日向飫肥へと移りました。これより、飫肥とともに福島(串間市)も領有しました。飫肥では、日向を掌握しようとする伊東氏の攻撃を度々受けました。

1538年、３代忠朝のとき島津氏の内紛に乗じて志布志を領有しましたが、1562年、５代忠親のときに伊東氏に飫肥を奪われ、志布志でも肝付氏に敗れ串間に移りました。

７代久賀以後は帖佐の地頭、黒木(薩摩川内市祁答院)の領主として島津本家に仕え、家老などの要職を得ました。後には黒木島津家とも呼ばれました。

2．島津忠朝・忠親

島津14代勝久の頃、島津本家の後継者をめぐって薩州家の島津実久と伊作家の島津忠良・貴久親子との争いが起きました。豊州家３代忠朝らは仲裁を試みましたが失敗に終わり、忠朝は薩州家実久方として参戦しました。

1538年、忠朝は都城の北郷氏、高山の肝付氏らとともに、実久の誘いを拒んだ志布志の新納氏を攻撃しました。新納氏を破った忠朝は、飫肥を長子の忠広に任せると志布志に移りました。(「城主編４　新納忠続・忠茂」参照)

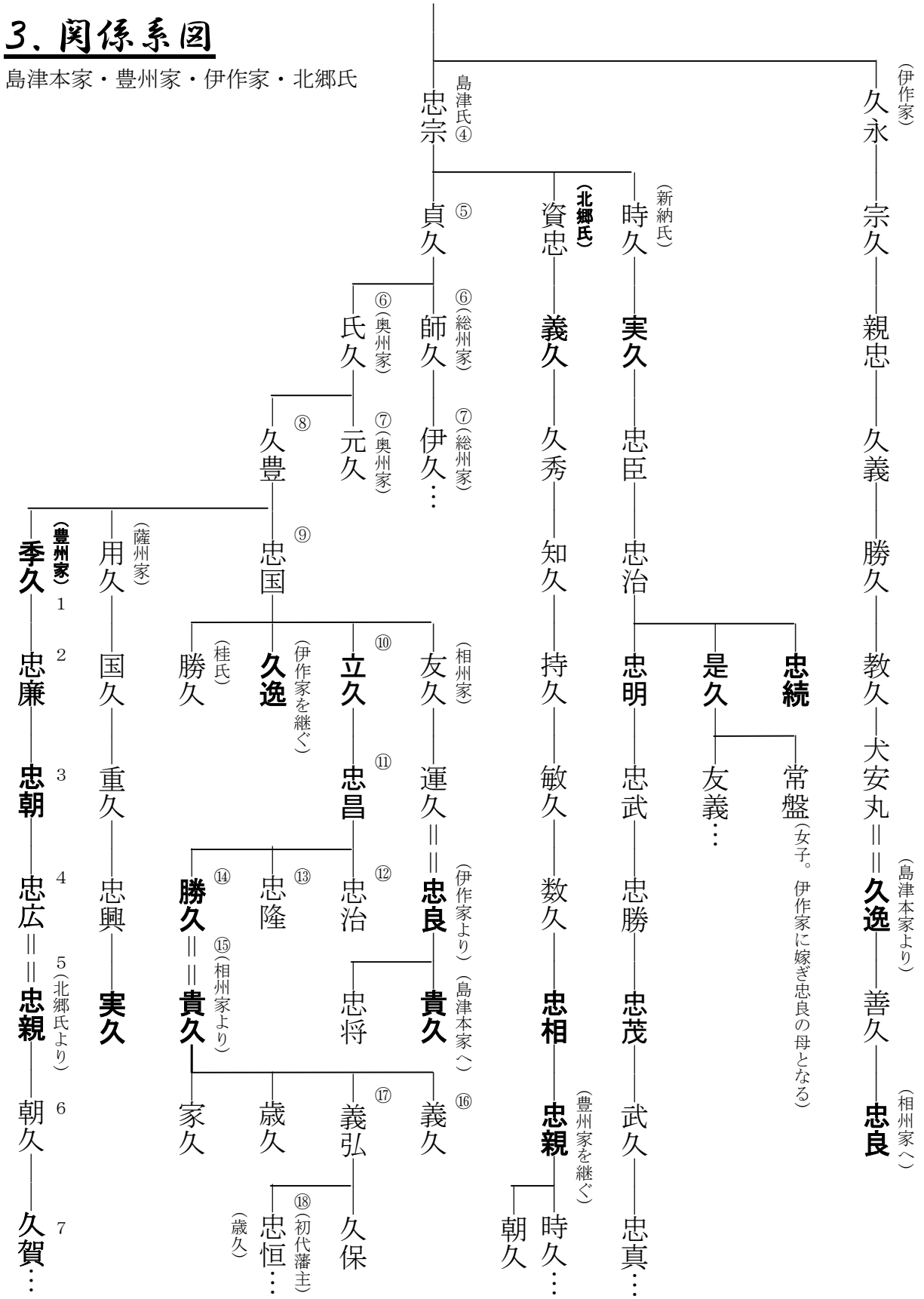
その後、肝付氏は忠良方に転じて日向の伊東氏と協調し、志布志を攻めるようになりました。1562年、伊東氏に攻められた飫肥城が陥落すると、５代忠親は志布志を攻める肝付氏に和睦を申し出ました。この結果、飫肥を伊東氏に、志布志を肝付氏に明け渡し、豊州家島津氏は串間に移りました。

3．豊州家と北郷氏

豊州家と関わりの深い一族に、北郷氏があります。北郷氏は、島津４代忠宗の子を始めとする島津氏の分家です。足利氏より薩摩迫(都城市山田町周辺)を与えられ北郷氏を称しました。２代義久のとき都之城(都城市内)に移り、８代忠相は飫肥の豊州家と協調し、現在の都城市・三股町・山之口町・曽於市(末吉・財部)を治めました。９代忠親は豊州家の養子となり、両家は協調して日向南部を掌握しました。豊州家は伊東氏に飫肥を奪われましたが、北郷氏は勢力をのばし恒吉(曽於市大隅町)や内之浦までを領有しました。また、江戸時代には島津本家の求めにより島津姓に戻し、北郷氏は都城島津氏となりました。

3. 関係系図

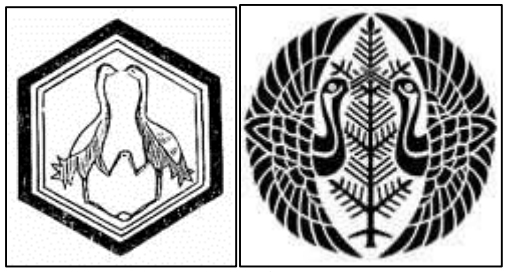
島津本家・豊州家・伊作家・北郷氏



肝付兼続(肝付氏)

志布志城における肝付氏の時期：1336年?、1562～1576年

1、肝付氏とは


肝付氏の家紋

平安時代の969年、薩摩国の役人に任命された伴兼行が鹿児島に赴任し、その孫である兼貞は大隅国の役人として肝付郡に入りました。伴氏は、古代日本の有力な氏族のひとつで、823年以前は大伴氏といいました。兼貞の子の兼俊の代、1036年に郡名をとって肝付氏を名乗りました。

以降、肝付氏は肝付郡高山を本拠地として、大隅に一大勢力を築きました。

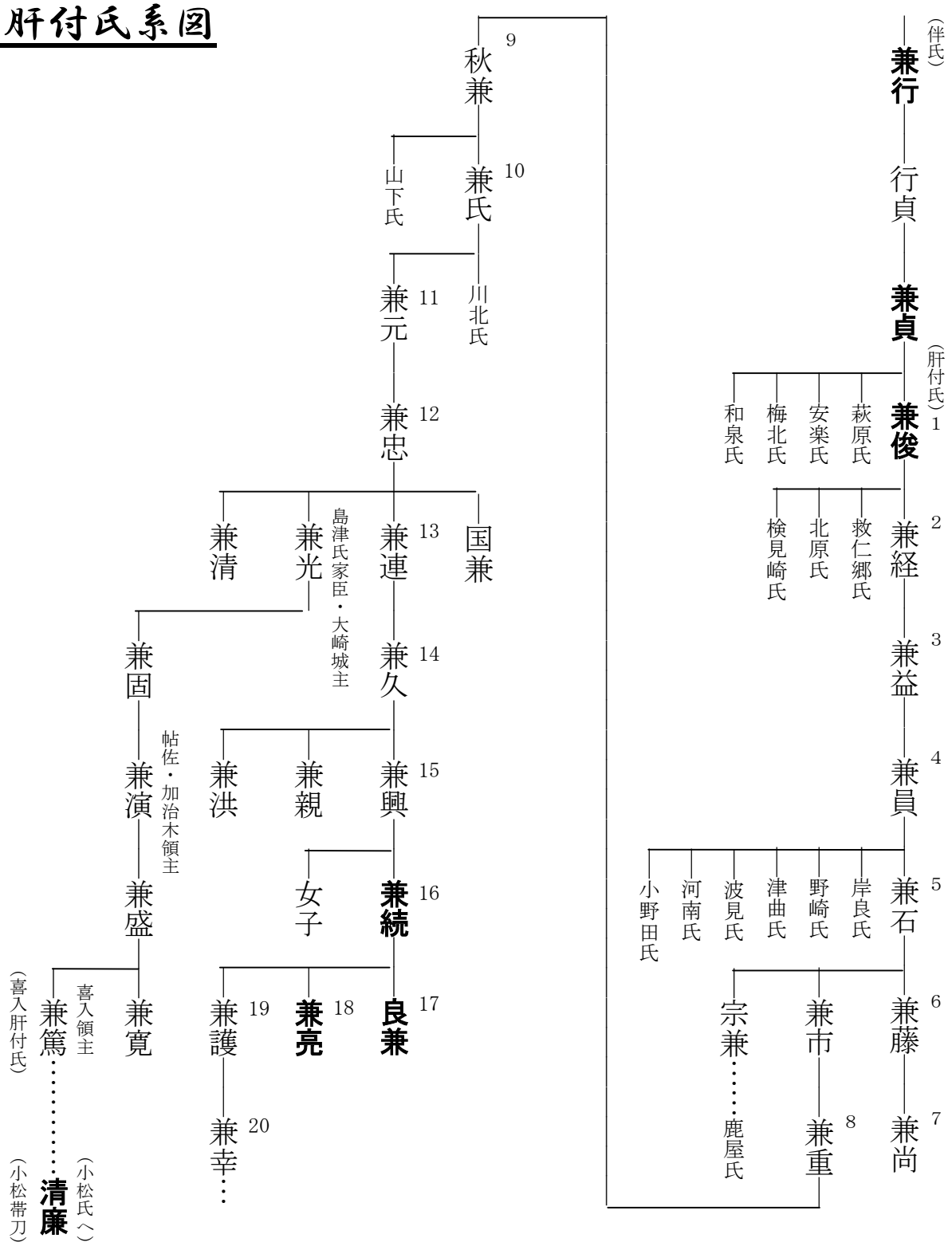
南北朝期(1335～1392年)には、南朝方として日向の伊東氏や禰寝氏とともに北朝方の島津氏らに対抗しました。南北朝期以後は、大隅に進出してきた島津氏に対し協調的な立場をとりましたが、領土をめぐって関係が悪化しました。肝付氏は伊東氏と協調して島津氏に対抗しましたが、1574年に降伏しました。1576年には志布志を含む肝付氏の領地は島津氏のものとなり、肝付氏は高山のみを領有することになりました。1580年には高山から阿多(南さつま市金峰町)に移され、その後は島津氏の家臣となりました。また、肝付氏の中には早い段階で島津氏の家臣となり、喜入(鹿児島市喜入町)の領主となった一族もありました。この家から小松氏へ養子に入ったのが、後の小松帯刀(清廉)です。

2、肝付兼続

肝付兼続は、父の死を受けて1533年に肝付氏の16代当主となりました。兼続は島津氏との関係を重視し、島津忠良(伊作家)の長女(御南)を妻に迎え、妹を忠良の長男である貴久(後の島津15代)に嫁がせ、友好な関係を築きました。

島津氏との友好関係を背景に大隅での勢力拡大に努めましたが、1538年に豊州家島津氏が新納氏を破り志布志を領有すると、次第に大隅・日向の領土をめぐり豊州家島津氏や北郷氏との争いが起き、島津氏との友好関係は崩れ、日向の伊東氏と協調して島津氏に対抗するようになりました。1553年には、嫡男の良兼に家督を譲り隠居しましたが、実権は保持したままでした。1561年からは島津15代貴久と本格的に敵対し、1562年には豊州家島津氏を破り志布志を領有しました。肝付氏にとって過去最大の領土を獲得した兼続は志布志を隠居所としましたが、1566年に島津氏の反撃によって本拠地である高山城が落城すると、志布志で没しました。志布志の下小西には、江戸時代の1782年に造られた兼続の追善塔があり、「肝付兼続の墓」として市の指定文化財となっています。

3. 肝付氏の衰退と島津氏の志布志領有

兼続の死後、17代良兼(1571年病没)、18代兼亮(かねあき)は志布志城を居城とし伊東氏の助力を得て、島津氏と戦いました。当センターに展示している内城跡の復元模型は、伊東氏の軍勢が入城した1574年正月の様子を想定したものです。兼亮は徹底抗戦を訴(うった)えましたが、島津15代貴久の姉である忠続の妻(御南(おなみ)；兼亮の義母)の進言などにより1574年には降伏し、島津氏に従(したが)いました。1576年には肝付氏の領地は高山のみとされ、1577年には島津氏の代官である鎌田政近(かまたまさちか)が志布志に入りました。以降、志布志は明治の廃藩置県(はいはんちけん)まで、島津氏(島津本家)の領有するところとなりました。

4. 肝付氏系図